

就学サポート相談会に参加した発達障害児を持つ保護者の相談会 前と就学後における子どもの状態の捉えと就学に関する思い

横山 三千代¹⁾, 市森 明恵^{2)†}, 表 志津子²⁾, 岡本 理恵²⁾

要 旨

本研究の目的は A 市就学サポート相談会（以下、相談会）に参加した発達障害児を持つ保護者の、相談会前と就学後における子どもの状態の捉えと就学に関する思いを明らかにすることである。

研究対象は、A 市発達相談センターの継続相談者で、2016 年度相談会に参加した発達障害児（疑いを含む）を持つ保護者 20 ケースの相談支援記録で、保護者の語った子どもの状態の捉えと就学への思いの記述を質的記述的に分析した。分析は相談会前と就学後のそれぞれにおいて行った。本研究は、金沢大学医学倫理審査委員会の承認を得て実施した。

相談会前における保護者の子どもの状態の捉えとして【子どもの発達に生活する上で支障となる特性がある】【学校生活でやっていけないかもしれない】【自分の子どもは相談の対象ではない】、就学に関する思いとして【通常学級・地域の学校への強い希望】【子どもに合わせた就学環境を整えたい】【生活力が付く就学先を選びたい】のカテゴリが抽出された。就学後では子どもの状態の捉えとして【学校生活に適應できている】【学校で適切な行動がとれていない】、就学に関する思いとして【情報共有による学校生活への安心】【順調に学校生活が送れそうな予感】【就学先への不満】のカテゴリが抽出された。

発達障害の子どもに適した就学環境を整えていくためには、保護者自身が子どもの特性を把握するとともに、就学先への申し送りを行う力を付けられるよう支援していくことが必要と考える。

KEY WORDS

children with developmental disorder, consultation support for enrollment,
life-long support, parents' recognition, information sharing

はじめに

2005 年に制定された発達障害者支援法では、乳幼児期の児に対し母子保健法に基づく健康診査を行うにあたり、発達障害の早期発見に十分留意すべきことが記され¹⁾、早期発見の体制が整えられた。

しかし、早期発見により就学前に適切な支援を受けていても、就学後にはうつや不登校などの二次的な障害が出現することが報告されている^{2,3)}。保育園や幼稚園から小学校へと生活する場や周りの支援者が変わる中で、就学前に受けられていた支援と同様の支援が就学後に引き継がれないことが、二次障害が生じる原因の一つと考える。先行研究でも発達障害児を持つ保護者の就学前の支援に対するニーズとして「支援へのつながり」が明らか

にされており⁴⁾、文部科学省のガイドラインにおいても「担任との信頼関係の構築」や、連絡帳や電話、メールなどを使用しての「情報の共有化」、関係者間での「情報の引継ぎ」として支援のつながりが必要であることが明記されている⁵⁾。また、保護者の就学後の支援に対するニーズとして「個別性に応じた支援」が明らかにされており、支援者に対して、発達障害がある子どもの個別性を理解した上での支援が求められている⁴⁾。以上のことから、発達障害児とその保護者には就学前後にわたる「切れ目のない支援」が求められていると考える。

また、発達障害への対応の基本として、本人が生活上どのようなことに困っているのか、どのように対応すれば本人に役立つのかを考える必要がある⁶⁾と言われ

1) 白山市役所健康福祉部発達相談センター

2) 金沢大学医薬保健研究域保健学系

ている。大人とは異なり子どもの場合には、自分自身で周囲の支援を求めることに限界があり、保護者の理解と協力が不可欠である。必要な対応を円滑に行うために重要となるのは、保護者が子どもの状態をあるがままに認め、批判を加えたりすることなくそのままに受け容れる、受容である⁷⁾。適切な療育などにつなげていくためには、自分の子どもの問題を保護者が受け止めて、事態を正確に認識し対応につなげる⁷⁾ことが必要となってくる。このことから、保育園・幼稚園から小学校へと環境や関わる人が変わる中で発達障害がある子どもに必要な対応が円滑に行われるためには、保護者の子どもの状態の捉えや就学への思いが重要となると考える。

先行研究では、発達障害児の就学前と就学後それぞれの時期にある保護者の支援に対するニーズは抽出されている⁴⁾が、就学前後の時期に継続的な支援を受けた保護者の思いや捉えの変化に着目した先行研究はない。

そこで本研究では、就学後の二次障害の発生を予防することを目的に行われた「就学サポート相談会」に参加した保護者の、相談会前と就学後における子どもの状態の捉えや、就学に関する思いを明らかにすることを目的とする。本研究結果により就学前後の発達障害児を持つ保護者への支援を考える上で必要な示唆が得られると考える。

目的

本研究の目的は、就学サポート相談会に参加した発達障害児を持つ保護者の、相談会前と就学後における子どもの状態の捉えと就学に関する思いを明らかにすることである。

方法

1. 研究対象

研究対象は、A市の2016年度就学サポート相談会（以下、相談会とする）に参加した発達障害児（疑いを含む）をもつ保護者55ケースの内、相談会前から継続的に支

援を受けていた20ケースの相談支援記録とした。分析する相談支援記録は相談会参加前の2016年4月時点と、相談会を修了し就学した後、引き続き経過を支援する中で記載された2017年7月のものとした。

A市は2014年度から就学前後の切れ目のない支援として発達相談センターでこの相談会を開催しており、2016年度に同様の事業を実施していた市は同県内ではA市のみであった。相談会は就学先で特別な支援が必要と思われる年長児を持つ保護者を対象とし、就学後の二次障害の発生を予防することを目的に、保護者が特別支援教育を正しく理解することと子どもの特性や対応方法を就学先へ伝えられるようになることを目指して行われている。保護者が子どもの特性や対応方法を就学先へ伝えられるための支援として、申し送り書の作成支援を行っており、これはA市と同県内のB特別支援学校の教育相談室が先進的に行っていた事業を参考に事業内容が組み立てられている。

相談会の概要は（表1）の通りである。

2. 研究方法

相談担当者が記載した相談支援記録のうち、相談会参加前と、相談会を修了し就学した後の相談支援記録の提供を受けた。相談支援記録は個人が特定されないよう、氏名、住所等の個人情報削除された状態で提供を受けた。相談支援記録は全て、発達障害児とその保護者に対する相談支援に携わるA市発達相談センターの保健師、保育士2名、臨床心理士の4名によって作成されたものである。

3. 分析方法

分析は、相談会を経て保護者の子どもの状態に対する捉えや就学に関する思いにどのような変化があったかを明らかにするため、相談会前と就学後それぞれにおいて、相談支援記録から保護者の子どもの状態の捉えと就学に関する思いの記述を抜き出し、意味のまとまりごとに短い文章に要約してコード化した。コードの意味の類似性を比較検討しながら分類し、類似した内容のコードのま

表1 就学サポート相談会の概要（全5回コース）

回	日程	項目	内容
1	6月	個別面談	・聞き取りや本人観察による発達特性の確認 ・特別支援教育に関する情報提供
2	6月	説明会 「特別支援教育について」	・教育委員会指導主事による講義
3	9月	体験談・説明会 「保護者体験談」	・特別支援教育を受けている子の保護者からの情報提供
4	10~12月	個別面談	・具体的な就学先選定のための相談対応
5	1月	説明会・相談会 「申し送り書の作成講義」	・就学先への申し送り書の作成方法や申し送り方法に関する講義 ・申し送り書の作成作業

とまりをサブカテゴリとした。サブカテゴリ間の類似性を検討し、類似したサブカテゴリのまとまりをカテゴリとした。その後、相談会前と就学後のカテゴリやサブカテゴリの比較から、保護者の思いの変化について考察した。

分析における妥当性と信頼性を高めるために、筆者を含む4名の研究者によって分析過程を繰り返し検証し、適宜修正を行った。

4. 倫理的配慮

本研究は、金沢大学医学倫理審査委員会の承認を得て実施した(No.826-1)。研究者がA市発達相談センターに対し、研究の目的、研究の方法、予想される利益と不利益、プライバシーの保護、研究への参加の自由と同意撤回の自由などについて文書を用いて説明し書面にて同意を得た。

また、A市発達相談センターのホームページ及びセンター内に研究の目的、研究方法、研究期間、研究に用いる情報の種類、予想される利益と不利益、プライバシーの保護、研究への不参加の自由、研究に関する窓口について掲示・公開し、情報の周知をはかった。

結果

1. 相談支援記録の概要

分析対象とした相談支援記録は男児17名、女児3名の記録で、主な相談者である保護者は19名の児においては母親、1名の児においては両親であった。発達障害の種類は主診断別に、自閉症スペクトラム障害(疑いを含む)13名、注意欠陥多動性障害2名、自閉症1名、広汎性発達障害1名、アスペルガー障害1名、発達障害1名、診断保留1名であった。

2. 相談会前の子どもの状態の捉えと就学に関する思い

保護者の相談会前の子どもの状態の捉えとして、【子どもの発達に生活する上で支障となる特性がある】【学校生活でやっていけないかもしれない】【自分の子どもは相談の対象ではない】の3つのカテゴリが、就学に関する思いとして、【通常学級・地域の学校への強い希望】【子どもに合わせた就学環境を整えたい】【生活力が付く就学先を選びたい】の3つのカテゴリが抽出された(表2)。以下、カテゴリを【】、サブカテゴリを〔〕、コードを<>で示し、カテゴリ別にカテゴリが抽出された過程を述べる。

【子どもの発達に生活する上で支障となる特性がある】

保護者は子どもの状態について<苦手なことも部分的に参加できるようになってきているが、まだ新しいことに対して苦手意識が強い>や<本人にとって苦痛な環境となると、自傷行為が激しくなると思う>と〔限られた環境でしか適応できない〕と捉えていたり、<呼びかけ

には反応しないことが多く、視線も合いにくいと感じ、話は聞けていないと思う><言葉からだけではイメージが付きにくいのだと思う>など、〔他者から発信される情報を受け取れない〕と捉えていた。また、<数字が大好きすぎて、家の中でもトラブルになる><こだわりが強く、関わりにくい>と〔特定のものに強くこだわる〕と捉えている保護者もいた。

【学校生活でやっていけないかもしれない】

また保護者は、<集団活動に参加できないことが心配>など〔集団活動の場での行動に不安がある〕と子どもの状態を捉えていた。さらに、<一方的な会話が多く、すぐ感情的になるのでいじめられるかもしれない>など〔友達とうまくやっていけないかもしれない〕とも捉えていた。

【通常学級・地域の学校への強い希望】

保護者は<通常級では学力面も難しくなると思われるが通わせたい>や、<通常級に通いながら、週1回通級指導教室に通うことを希望>といった〔通常級に通わせたい〕という就学先への思いを抱いていた。また<地域の学校を選ばない選択をすると、地域とのつながりがなくなってしまうのが心配。地域の中で、わが子の存在が知られない状態となってしまうのが不安>などの思いから、〔特別支援学校ではなく地域の学校に通わせたい〕という思いも持っていた。

【子どもに合わせた就学環境を整えたい】

保護者は<友達とのトラブルを避けるために、通級指導教室か特別支援学級を検討したい>など〔友達との関係が上手くいくような就学先を選択〕することを重要視する意向があった。また、<学習面でつまずきが出てくると思うので、通級指導教室を希望したい>といった〔子どもに負担がかからない環境を整えたい〕思いを持っていた。

一方で、<特別支援学級がいいのではと思っているが、相談会の参加や学校見学をして決めていきたい>と〔就学先の情報収集をした上で選択する意向〕を持っていたり、<特別支援学級よりも特別支援学校の方が専門性は高いのではないかと>などの〔子どもに合わせた指導が受けられる就学先を模索〕する思いがあった。

また<友達とトラブルがあったときに対応してくれる人が欲しい>と、〔友達との関係が上手くいくためのサポートを希望〕していた。

【生活力が付く就学先を選びたい】

保護者の中には、<安定した環境を保障し、学力よりも生活力を付けてあげたい>といった〔生活力が付く就学環境を希望〕する思いがあった。

表 2 相談会前の子どもの状態の捉えと就学に関する思い

カテゴリ	サブカテゴリ	コード	
子どもの状態の捉え	子どもの発達に生活する上で支障となる特性がある	限られた環境でしか適応できない ・苦手なことも部分的に参加できるようになってきているが、まだ新しいことに対して苦手意識が強い。 ・本人にとって苦痛な環境となると、自傷行為が激しくなると思う。	
		他者から発信される情報を受け取れない ・呼びかけには反応しないことが多く、視線も合いにくいと感じ、話は聞けていないと思う。 ・言葉からだけではイメージが付きにくいのだと思う。 ・友達に対して一方的に何度も同じことを言うので、友達が嫌がり出している。 ・母の指示も入らないことが多く、言い合いになることが多い。	
		特定のものに強くこだわる ・数字が大好きすぎて、家の中でもトラブルになる。 ・こだわりが強く、関わりにくい。	
	学校生活でやっていけないかもしれない	集団活動の場での行動に不安がある ・環境に慣れにくいことが心配。 ・指示待ちの姿が心配。 ・集団活動に参加できないことが心配。 ・トラブルと、集中力に不安がある。 ・集まりで唐突に話し出す姿が心配。 ・団体行動ができていない。みんなと同じことをするのが嫌な性格なのかもしれない。 ・年中から年長になるだけでも本人にとってすごいストレスがあったのに、学校に行くだけでどんなストレスになるのが心配。	
		友達とうまくやっていけないかもしれない ・一方的な会話がが多く、すぐ感情的になるのでいじめられるかもしれない。 ・手が出るので、小学校に行ってから友達と上手くやっていけるか心配。 ・2～3歳の時から感情のコントロールができなかったり友達に手が出てしまい、トラブルは多かった。	
	自分の子どもは相談の対象ではない	自分の子どもは問題ない ・同級生にはうちの子よりもっと動きが激しく、関わりにくい子が何人もいる。 ・家で困ることは全くない。幼稚園が勤めるので来ているだけ。 ・今でも自分が相談していることが大袈裟なのではないかと思っている。 今後行動は改善すると思う ・誕生会の本番に全く参加していなかったので注意したら、反省している様子が見られ、徐々に場合わせた行動ができるだろうと思っている。	
就学に関する思い	通常学級・地域の学校への強い希望	通常級に通わせたい ・通常級では学力面も難しくなると思われるが通わせたい。 ・通常学級への就学希望。 ・通常学級に通いながら、週1回通級指導教室に通うことを希望。 特別支援学校ではなく地域の学校に通わせたい ・地域の学校を選ばない選択をすると、地域とのつながりがなくなってしまうのが心配。地域の中で、わが子の存在が知られない状態となってしまうのが不安。 ・漠然と地域の支援学級かなと思っていたが、特別支援学校の体験と見学もして決めていきたい。 ・言葉がまだ出ず、奇声も出る状態なので、地域の学校は難しいかもしれないが希望したい。	
	子どもに合わせた就学環境を整えたい	友達との関係が上手いような就学先を選択	・大人数の中では、友達とのやりとりの面で理解できないことがもっと出てくる。本人が分かりやすい環境の中で混乱しないためにも、少人数制の特別支援学級を希望する。 ・友達とのトラブルを避けるために、通級指導教室か特別支援学級を検討したい。 ・好きな友達に近づいていき、嫌がっても離れない時がある。通級指導教室の希望だが、無理なら特別支援学級も検討する予定。
		子どもに負担がかからない環境を整えたい	・就学先は、刺激が少ない少人数クラスでの環境にしてあげたい。 ・学習面でつまづきが出てくると思うので、通級指導教室を希望したい。 ・知的な遅れはないと思っていたが、医療機関での検査結果で言語理解の数字が低かったので、医師の勧めもあり通級指導教室を希望する。
		就学先の情報収集をした上で選択する意向	・特別支援学級がいいのではと思っているが、相談会の参加や学校見学をして決めていきたい。 ・就学先については、教育委員会の就学相談を受けた上で検討。
		子どもに合わせた指導が受けられる就学先を模索	・就学先は特別支援学校か地域の特別支援学級と考えているが、どちらかという特別支援学校の方向。地域だと先生の力量やメンバー等で指導力が保証されているわけではなく、不安な印象を受ける。 ・特別支援学級よりも特別支援学校の方が専門性は高いのではないかと。
		友達との関係が上手いようなためのサポートを希望	・友達と遊ぶことは好きだが、自分の思いを伝えることが苦手。就学は、子どもに合った支援が受けられることを希望。 ・友達とトラブルがあったときに対応してくれる人が欲しい。
	生活力が付く就学先を選びたい	生活力が付く就学環境を希望 ・安定した環境を保障し、学力よりも生活力を付けてあげたい。	

【自分の子どもは相談の対象ではない】

20 ケース中 2 ケースにおいては「家で困ることは全くない。幼稚園が勧めるので来ているだけ」というように「自分の子どもは問題ない」と捉えており、発達相談センターへ相談に来ることに納得していない様子がうかがえた。また、「誕生会の本番に全く参加していなかったので注意したら、反省している様子がみられ、徐々に場に合わせた行動ができるだろうと思っている」というように「今後行動は改善すると思う」と捉えている様子

が見受けられた。この 2 ケースに関しては、他の 18 ケースとは子どもの状態の捉えが異なっていた。

3. 就学後の子どもの状態の捉えと就学に関する思い

保護者の就学後における子どもの状態の捉えとして、【学校生活に適応できている】【学校で適切な行動がとれていない】の 2 つのカテゴリが、就学に関する思いとして、【情報共有による学校生活への安心】【順調に学校生活が送れそうな予感】【就学先への不満】の 3 つのカテゴリが抽出された（表 3）。

表 3 就学後の子どもの状態の捉えと就学に関する思い

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
子どもの状態の捉え	学校生活に適応できている	<ul style="list-style-type: none"> ・周囲の子どもに感心されるくらい物おじしくなり、たくましくなった。 ・登校時は交通ルールを教える意味で付き添っているが、今では本人もすっかり安心して元気に歩いている。
	学校での生活に対応している	<ul style="list-style-type: none"> ・初めてのことも多くあったが、本人なりにこなしている。 ・自宅では我儘だが、学校では予想以上に頑張っている。 ・少しずつ理解したことを 1 人で行動できることが増えてきている。 ・現在は、学校も学童も本人は喜んで行っているのがありがたい。 ・現在は特別支援学級と交流級で落ち着いて過ごしている。
	学校で適切な行動がとれていない	<ul style="list-style-type: none"> ・授業中は座ってられない。立ち歩いている。 ・図工の時間は大好きで、逆に過集中になっており、切り替えが難しい。
就学に関する思い	情報共有による学校生活への安心	<ul style="list-style-type: none"> ・申し送りをきっかけに最初から通級の先生と頻回に連絡を取り合うことができています。学習方法をその都度調整できている。 ・学校側は、申し送り書の内容に合わせて子どもの困り感を受け止め、理解ある対応をしてくれていると思う。 ・申し送り書があったことで子どもの不安を受け止めてもらいながら生活できている。 ・申し送りで最初から顔を合わせていたので、こちらも安心して応じることができています。今のところは順調と思っている。 ・自分からの書類上の申し送りを元に、学校の先生が園に向いて情報交換がなされたため、なおスムーズに学校生活をスタートできたのだと思う。 ・入学式前に下見と申し送りをしたことで、自分も支援の内容を確認できて安心することができた。
	先生と細かく連絡が取れる状況を好ましく思う	<ul style="list-style-type: none"> ・先生は、連絡帳や電話で何かある度に連絡してくれている。 ・かなり個別対応してくれているようで、本当に良かったと思っている。 ・担任に本人が活躍できるような係を提案してもらっている。 ・連絡帳で日々たくさんのやりとりができており、一緒に子どもへの対応方法を考えることができています。 ・担任は些細な事でも何かあるとすぐに電話をくれている。 ・学校での様子は担任が連絡帳で細目に知らせてくれ助かっている。 ・先日家庭訪問もあり、家庭での様子も確認しながら個別対応に心がけてくれている。 ・担任の先生とクールダウンの方法について話し合っ、自分でお尻をポンポンと叩いたり、場所を変えたり、保健室で過ごしたりと、いくつかの方法を試してもらっている。 ・通常級と通級指導教室の先生も常に情報交換されていることが確認できています。
順調に学校生活が送れそうな予感	就学の滑り出しが良好	<ul style="list-style-type: none"> ・就学前から心配しており、就学後もそれでよかったのかと気になっていたが、適切な学習環境だということが確認できた。このまま様子を見ていきたい。 ・学校生活や放課後の過ごし方については特に問題ない。 ・母としてはまずまず良好だと思っている。 ・学校生活は予想以上に良い滑り出しだった。
	身近な人のサポートによる安心	<ul style="list-style-type: none"> ・登下校についても心配していたが、登校時は近所の従妹が一緒に行ってくれて、下校時は祖母がそっと見守りしてくれ、安心できている。 ・祖母の理解も得ることができた。
就学先への不満	就学先の対応への不満	<ul style="list-style-type: none"> ・担任と通級の先生の連絡が上手くいっていないのが残念。 ・登校渋りの理由は、授業中に手を上げてもらうように当ててもらえないからだと思う。

【学校生活に適応できている】

保護者は子どもの状態を<周囲の子どもに感心されるくらい物おじしなくなり、たくましくなった>など〔物おじせずに行動できるようになった〕と捉えていたり、<初めてのことも多くあったが、本人なりにこなしている>といった〔学校での生活に対応している〕と捉えていた。

【情報共有による学校生活への安心】

保護者は<申し送りをきっかけに最初から通級の先生と頻りに連絡を取り合うことができている。学習方法をその都度調整できている>との思いや<自分からの書類上の申し送りを元に、学校の先生が園に向いて情報交換がなされたため、なおスムーズに学校生活をスタートできたのだと思う>などの〔申し送りにより学校側と情報が共有できていることでの安心〕を感じていた。

また、<担任に本人が活躍できるような係を提案してもらっている>や、<担任は些細なことでも何かあるとすぐに電話をくれている>など、日常的に〔先生と細かく連絡が取れる状況を好ましく思う〕思いが明らかとなった。

【順調に学校生活が送れそうな予感】

保護者は、<母としてはまずまず良好だと思っている><学校生活は予想以上に良い滑り出しだった>などと、〔就学の滑り出しが良好〕との思いを感じていた。

また、<祖母の理解も得ることができた>など、学校での直接の支援者以外の人からも〔身近な人のサポートによる安心〕を感じていた。

【学校で適切な行動がとれていない】

相談会前に発達相談センターへ相談に来ることに納得していない様子が見られた2ケースにおいては、<授業中は座ってられない。立ち歩いている><図工の時間は大好きで、逆に過集中になっており、切り替えが難しい>といった、〔授業中適切な行動がとれていない〕子どもの様子がかうかがえた。

【就学先への不満】

また、この2ケースでは<担任と通級の先生の連絡が上手くいっていないのが残念>、<登校渋りの理由は、授業中に手を上げてもらうように当ててもらえないからだと思う>など〔就学先の対応への不満〕も見受けられた。

考察

1. 就学前の子どもの状態の捉えと就学に関する思い

本研究結果から、相談会前の保護者は子どもの状態を【子どもの発達に生活する上で支障となる特性がある】や【学校生活でやっていけないかもしれない】と捉え、就学に関して【子どもに合わせた就学環境を整えたい】

といった思いを抱いていることが明らかになった。先行研究においても、就学前に保護者は児の気かりな特性を幼稚園・保育所から教えてもらうことにより認知していること⁸⁾や、小学校での発達障害のある子どもの仲間関係に関する懸念を抱く⁴⁾などの思いを抱いていること、また、専門施設から児の就学支援の情報を得ることで就学環境を整えたいという保護者の思いが報告されており⁸⁾、先行研究と同様の結果が得られたと考える。また今回の研究では【通常学級・地域の学校への強い希望】の思いも持ち合わせていることが新たに明らかになった。これは<通常級では学力面も難しくなると思われるが通わせたい>というように、子どもの特性よりも通常の学級に通わせたいという保護者の思いが先行した思いである。医師から診断告知されていても、子どもの障害を受容していくことは親にとっては難しく、親はいつか正常に追いつくのではないかという期待とそうではない落胆の慢性的なジレンマを抱えている⁹⁾と言われている。保護者は子どもの発達上の特性を捉えている一方で【通常学級・地域の学校への強い希望】も持ち合わせ、慢性的なジレンマを抱えていると考える。中山らは就学前の発達障害児の保護者の受容を支える支援技術として「ゆれる保護者を見守る」支援を明らかにしている¹⁰⁾。保護者が【通常学級・地域の学校への強い希望】といった揺れる思いを持ち合わせていることを支援者が受け止め理解して、保護者の受容を支えていくことが必要となると考える。また、この思いを持つ保護者の中には、<地域の学校を選ばない選択をすると、地域とのつながりがなくなってしまうのが心配>という思いを持つ保護者もいた。子どもがこの先も地域で生活していくことを見据えた時に、就学によって地域とのつながりをなくしたくないと思う保護者の思いは当然のものと考えられる。1994年のサマランカ宣言以降、世界的にインクルーシブな社会の実現を目指す流れがある¹¹⁾。一方で、わが国においてはいまだ進められている途上であり、初等・中等教育では従来の特別支援学校、学級という分離型の特殊教育の仕組みが継続している現状がある。教育の仕組みが今後変わっていくことで、地域とのつながりをなくすことなく教育を受けられる環境を整えていくことは、保護者の【通常学級・地域の学校への強い希望】を和らげ、子ども自身がその地域・社会で生活していくことを支えることに繋がっていくと考える。

発達障害について平岩は最終目標に「社会で生きていけるようにする」ことを挙げている¹²⁾。【生活力が付く就学先を選びたい】という思いは、子どもの将来を見据えた思いであり、この「社会で生きていけるようにする」最終目標につながると思う。保護者の受容を支えつつ、

子どもの将来を見据えた選択を保護者が行っていけるよう支援していく必要があると考える。

2. 就学後の子どもの状態の捉えと就学に関する思いの変化

今回の分析対象となったケースは全て相談会前から発達相談センターの支援を受けていた。これらのケースは早期から受診行動につながり、年長児到達時には19ケースが障害告知を受けていた。また保護者に対しては、発達特性を認識できるための過程が支援されていた。そのためほとんどの保護者は相談会前の時点で【子どもの発達に生活する上で支障となる特性がある】と捉えており、子どもの特性を把握している状況があった。このような保護者の子どもの状態の捉えは、相談会前の【学校生活でやっていけないかもしれない】から、就学後には【学校生活に適應できている】へと変化していた。また、就学に関する思いは【通常学級・地域の学校への強い希望】【子どもに合わせた就学環境を整えたい】【生活力が付く就学先を選びたい】から、【情報共有による学校生活への安心】【順調に学校生活が送れそうな予感】へと変化していた。保護者自ら申し送りを行うことで、就学後には<かなり個別対応をしてくれているようで、本当に良かったと思っている>など、先生との日常的な情報交換による就学先との良好な関係性や信頼感が作られていることがうかがえた。保護者自身による学校への申し送りは、[先生と細かく連絡が取れる状況を好ましく思う]状況を生みだし【情報共有による学校生活への安心】につながると考える。また、保護者は【順調に学校生活が送れそうな予感】も持っており、これは子どもが【学校生活に適應できている】状態であると捉えられているため、この先の学校生活に対して明るい見通しを持つことが出来ているのだと考える。

このように、保護者が子どもの特性を把握し、保護者自身による就学先への申し送りを行う力を付け、就学先に対応を求めることができるようになることは、発達障害を持つ子どもに適した就学環境を整えることにつながる事が推察される。

一方で、相談会前に【自分の子どもは相談の対象ではない】と発達相談センターへ相談に来ることに納得していない様子が見受けられた2ケースにおいては、就学後保護者は【学校で適切な行動がとれていない】子どもの様子を捉え、【就学先への不満】を持っていた。保護者が子どもに発達上の特性があることを認められていない状態であると、就学先に対して「子どもにどのような特性があるか、どのように対応してほしいか」の申し送りを行うことは難しい。適切な申し送りが行えなければ、就学先で子どもに合わせた対応が行われにくく、結果と

して、子どもが適切な行動をとれない状況となり、就学先への不満につながるのではないかと考える。先にも述べた通り、子どもの障害を受容していくことは親にとっては難しく、時間がかかる。保護者に対しては出来るだけ早期のうちから保護者と問題を共有し、診断につながり、保護者の受容を支えるための経過的支援¹⁰⁾を丁寧に行っていく必要がある。その上で、保護者自身が就学先と様々な情報共有を行える力をつけるための支援が求められる。保護者が就学先の特徴を理解できるような情報提供や、子どもに適した就学先を選択していける支援とともに、保護者自身による就学先への申し送りを行う力を養う支援を行うことで、発達障害の子どもに適した就学環境を整えていけると考える。

研究の限界と今後の課題

本研究は発達相談センターにおける支援活動の中で支援担当者が記載した相談支援記録の記述の分析であるため、子どもの状態の捉えや就学への思いについてのデータが限定的な部分があり、結果として詳細な表現ができないカテゴリがあることは本研究の限界である。分析対象とした記録は、相談会に参加する以前から支援を受けていたケースのものであり、相談会で初めて支援が開始されたケースにおいては障害の診断告知が行われていないことが多く、本研究結果はあてはまらないと考える。今後は、相談会で初めて支援が開始されたケースについても同様な分析を行い、以前から支援を受けていたケースと比較検討を行うことで、診断告知が行われていない保護者の子どもの状態の捉えや就学に関する思いについてさらに明らかに出来るかと考える。

結論

発達障害児を持つ保護者の子どもの状態の捉えと就学に関する思いには、相談会前において【子どもの発達に生活する上で支障となる特性がある】【学校生活でやっていけないかもしれない】【自分の子どもは相談の対象ではない】【通常学級・地域の学校への強い希望】【子どもに合わせた就学環境を整えたい】【生活力が付く就学先を選びたい】があった。就学後には、【学校生活に適應できている】【学校で適切な行動がとれていない】【情報共有による学校生活への安心】【順調に学校生活が送れそうな予感】【就学先への不満】へと変化していた。

発達障害の子どもに適した就学環境を整えていくためには、保護者自身が子どもの特性を把握するとともに、就学先への申し送りを行う力を付けられるよう支援していく必要があると考える。

文献

- 1) 文部科学省：発達障害者支援法，第五条，2005
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/main/1376867.htm (閲覧 2018.3.08)
- 2) 本田秀夫：自閉症スペクトラム 10人に1人が抱える「生きづらさ」の正体，SB新書，111-114, 140-155, 2013
- 3) 永井利三郎監修，荒木田美香子，伊藤美樹子，他：発達障害の子どもの理解と関わり方入門，広汎性発達障害・ADHDの幼児期から学童期の支援，大阪大学出版会，3-29, 2010
- 4) 中井靖，神垣彬子：就学前後を一体的に捉えた発達障害のある子どもを持つ親に対する支援モデルの構築，小児保健研究 71(3)，399-404, 2012
- 5) 文部科学省：小・中学校におけるLD（学習障害），ADHD（注意欠陥／多動性障害），高機能自閉症の児童生徒への教育支援体制の整備のためのガイドライン（試案），第5部，2004
- 6) 平岩幹男：親子保健 24のエッセンス，第5章 発達障害とその関連，16 発達障害とは，医学書院，142, 2011
- 7) 平岩幹男：親子保健 24のエッセンス，第5章 発達障害とその関連，18 親子保健における障害や疾患の発見と受容，医学書院，158-159, 2011
- 8) 藤田千春，荒木田美香子，今井美保：自閉症スペクトラム障害がある児の母親が就学前後に認知したソーシャルサポート，国際医療福祉大学学会誌 19(2)，2014
- 9) Willner,S.M.,&Crane,R.：A parental di-lemma, The child with marginal handicap. Social Casework: The Journal of Contemporary Social Work, 60, 30-35, 1979
- 10) 中山かおり，齋藤泰子，牛込三和子：就学前の発達障害児とその家族に対する保健師の支援技術構造の明確化ー支援の開始から保護者の障害受容までの支援に焦点を当ててー，日本地域看護学会誌 11(1)，59-67, 2008
- 11) 国立大学法人 筑波大学，指定課題 1 大学等に通学する障害者に対する支援モデル事業 成果報告書，2017
http://dac.tsukuba.ac.jp/shien/wp/wp-content/uploads/seika_report.pdf (閲覧 2018.5.6)
- 12) 平岩幹男：地域保健活動のための発達障害の知識と対応，第2章発達障害とは何か 支援よりも理解を，5 最終目標は何か？，30-31, 2011
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/1298152.htm (閲覧 2018.3.08)

Clarification of parents' recognition of children's condition with developmental disorder and feelings about school enrollment before attending consultation session and after admission

Michiyo Yokoyama¹⁾, Akie Ichimori^{2)†}, Shizuko Omote²⁾, Rie Okamoto²⁾

Abstract

This study was performed to clarify parents' recognition of their child's conditions of developmental disorder and feelings about school enrollment before attending consultation sessions and after school admission.

Consultation support records of 20 parents of children with developmental disorders (including children suspected to be developmentally disabled) who had attended multiple consultation meetings in A city were examined. The parents' descriptions of their child's condition and feelings about the child's school admission were analyzed qualitatively. The analysis was conducted before the consultation session and after school admission. This study was conducted with the approval of the Medical Ethics Committee of Kanazawa University.

Before the consultation, the parents' recognized the following: "The child has developmental characteristics that interfere with quality of life," "Worried about the child's school life," and "Consultations do not pertain to my child." Their feelings about school enrollment were as follows: "Strong desire for entrance to normal classes/local school," "Want a suitable school environment for the child," "Want to choose a school where the child can acquire life skills." After admission, the parents recognized the following: "The child can adapt to school life" and "The child does not behave appropriately at school." Their feelings about school enrollment were as follows: "Peace of mind about school life through information sharing," "Feel that school life will go smoothly," and "Dissatisfaction with school."

To prepare for enrollment of a child with a developmental disability in a school with a suitable environment, parents must recognize the particular characteristics of their child. It is necessary to support the parents to enable them to describe and inform the school of their child's condition.